

吉田健一 氏に聞く(下)

公益社団法人日本ストリートダンススタジオ協会
代表理事

潮流 ◆ 鹿野泰輔 著

潮流

小さな成功体験の積み重ねから

——一般に、ダンスというと「自分にはできないのでは」という意識を持ちがちです。

前回(5月7・14日付1476号)もお話ししましたように、私たちの活動は中学校でのダンスの必修化を契機に指導に困っている先生方をサポートするのがスタートでした。何しろ、始めた頃は、「自分もヒップホップのダンスをやったことが一度もないのに、生徒に指導ができるのか」とい

う反応でした。ところが、実際に先生方対象の研修や出張授業などでは、「難しいときのでは」という意識を持ちがちです。前回(5月7・14日付1476号)もお話ししましたように、私たちの活動は中学校でのダンスの必修化を契機に指導に困っている先生方をサポートするのがスタートでした。何しろ、始めた頃は、「自分もヒップホップのダンスをやったことが一度もないのに、生徒に指導ができるのか」とい

校歌で踊り、地元を学習

踊育(だんいく)や研修のほかに
キャリア教育や地元学習の観点から
校歌を使ったダンスづくりで
コンクールに出場する活動も実施してきた。

——中学校だけでなく、幼稚園や小学校、高校の先生方や教職を目指す大学生などに、まずはダンスそのものに関心を持つてもらうことが重要ですね。

ストリートダンスであったり、ヒップホップ系の音楽のダンスについて、「よくわからない」という反応があるのは当然だと思います。中学校での必修化でも、「音楽はどう用意するのか」「振り付けはどうしたらよいのか」「指導の方法はどうすれば」と最初はまったく教材も指導案も含めて「ないない尽くし」の状態でした。まずは、ストリートダンスについて、イメージを持つてもらおうと、当協会のホームページでも、幼稚園から高校までの各年代向けに、実際にダンスをしている動画を提供していますが、すでに150万回以上、再生されていますので、関心は広がっているようです。学校関連の動画で、これほど再生された動画はあまり無いのではないでしょう。

校歌を学び、ダンスで表現

——踊育（だんいく）や必修ダンスへの対応だけでなく、校歌を活用した創作ダンスで参加が可能なダンスコンクールなども実施されています。

経済産業省主催のキャリア教育アワードで優秀賞を受賞したキャリア教育プログラム「ダンスアドベンチャー」があります。これは、校歌を通じて地元を学び、クラスが一つにまとまる教育活動です。校歌の歌詞には、その地域の地理や歴史、農産物や産業などの情報がぎっしり詰まっています。

その校歌の歌詞に込められた先人の思いや地域の歴史や文化について、地域の人や有識者から学び、学んだことをダンスで表現しようというプログラムです。その学校の校歌をもとにしていますので、オリジナルのダンスができますし、みんなで振り付けを考えながら、団結したり、地元愛を育む機会になります。

この「ダンスアドベンチャー」のプログラムは、キャリア教育としてのねらいや校歌の歌詞を深める活動、校歌に秘められた「謎」を解き明かす活動、プロのダンサーからダンスの基礎を学んでチーム毎に地元

を表現する振り付けを考えて練習する活動、保護者や地域の人、お世話になつた人をダンスコンクールに招待してダンスを披露し感謝の気持ちを伝える活動、全体の振り返りと新聞づくりの活動などで構成されるプログラムです。当協会では、ダンスアドベンチャーを実施してダンスコンクールの出場を目指す学校のサポート活動などを行っています。

——このようなプログラムを作ったきっかけは何ですか。

学校の中で、一番身近な音楽は校歌ではないかと考えました。ただし、校歌のままだとダンスに必要なリズムにはなりません。また地域の歴史や文化がつまつた歌詞なのに、それがあまり理解されないまま、ただ歌っているケースもあります。そこで、校歌の歌詞を理解し、それにリズムを付けて、ダンスで表現することで、子どもにとつては主体的な学びにもなりますし、地元愛も育まれるのではないかと考りました。2015年からスタートして、今年で4年目になります。

——実際には校歌の歌詞からダンスを考えたりする子どもたちの様子は、どのようなものですか。

「ダンスアドベンチャー」のプログラムでは、ダンスに苦手意識を持っている子どもも楽しく参加できるように、音楽の表現や歌詞の意味調べなどを担当したり、ダン



公益社団法人日本ストリートダンススタジオ協会
代表理事

吉田健一

よしだ・けんいち〇北海道出身。関西大学商学部、京都大学公共政策大学院修了。社長秘書、大手人材派遣会社のグループ会社社長、コンサルティング業務、フィットネスクラブの立ち上げ・運営業務などを経験したのち、ダンスが学校で必修化されることを知り、日本ストリートダンススタジオ協会の設立に賛同。2010年より現職。

スが好きな子どもは斬新な振り付けを考えたり、衣装を考えたりと、役割を分担しながら、全員で知恵を合わせて、一つの作品を創り上げていきます。

普段、クラスの中で目立たない子どもが、振り付けのアイデアなどで、みんなから「それ、いいね」と褒められたりすることもあります。時には、「どの振り付けが格好良いか」をめぐって、真剣に自分の思いをぶつけ合う姿を見かけます。先生からも「目標を持って、そのために話し合いをして一つの作品にしていく、良い機会になっている」と評価していただきました。

また最終的にダンスコンクールに参加できなくとも、出来上がった作品を学校に保護者や地域の人たち、作品作りでお世話になった人たちを招いて、発表会をすることによって、達成感を持てる場にもなっています。

ダンスの授業としてだけでなく、「組み体操」などの代わりに運動会・体育祭の出番などと関連付けて教科や総合的な学習の時間などを活用した学校の教育プログ

ラムとして8時間から15時間程度を充ててあります。学校で行うことで、気付いたことはありますか。

子どもたちや卒業生である保護者や地域の人にとって、校歌は馴染みのあるものですが、意外に先生方がその意味を知らないというケースがありました。異動などもありますし、式典などで校歌の練習はしても、歌詞の意味についてじっくり考える機会がないからでしょうか。このプログラムでは、プロのダンサーなども参加して、子どもたちと一緒に振り付けを考えることもありますが、「この歌詞の意味は?」とプロのダンサーが先生に尋ねても、はっきりした答えが出てこないこともありました。また、校歌の歌詞をヒントに、地域の人や有識者から、地元の歴史や文化のことを聞き出して、それをダンスの振り付けの表現に生かすこともあり、校歌をきっかけに地域学習が広がることも少なくありません。例えば、地域の社会福祉協議会の人や図書館の司書さん、教育委員会で地元の歴史や文化財に詳しい人に聞きに行ったり、地域のお寺や神社に関わった伝統文化の行事について、子どもたちが「取材」に行ったりしています。こうした学校の外部の人からいろいろなことを聞きながら、改めて地元の魅力に気付いていくことが多いですね。

——踊育(だんいく)のほかに、貴協会が企業や大学などと連携した講座や研究には、どのようなものがありますか。

これまでも奈良県立医科大学と認知症予防のダンスプログラムを開発してきましたが、3カ月間ダンスに取り組むことで短期記憶が1・5倍向上するなどの効果がありました。企業内でのダンスの活用によるストレス解消や、前回お話しした「ロコモ」「メタボ」予防ダンスなども、さらに検証を進めていく予定です。

また、東京大学とは幼稚園児とダンスの教育効果について、京都大学とは職場での運動にダンスを取り入れた効果の研究を、神戸大学と認知症予防におけるダンスの継続率の研究などを進める予定です。

——最後に学校関係者にひと言。

ダンスの必修化が始まった頃は、「ヒップホップは『不良』がやるもので、授業でやるのは生徒指導上の問題にならないか」などと心配する校長先生も多かったのですが、最近はそうした声は聞かなくなりました。ただ、決まつた音楽や振り付けをただ覚えるだけのダンスではなく、表現したり、体を動かすことの楽しさが実感できるダンスの授業がさらに広がってほしいと思いま

す。校歌でダンスなどの新しい取り組みも始まっていますので、これからもこうした学校での取り組みを支援していく活動に力を入れていきたいと思っています。

公益社団法人日本ストリートダンススタジオ協会 = <http://nssa.or.jp/>

校歌の意味、地域の人から学ぶことも

——校歌の歌詞をダンスで表現する活動を学校で行うことで、気付いたことはありますか。